義理書

登錄 4291 號
第 門
第 部
記號
函架
平野圖書箋

UNIVERSITY OF KANSAS LIBRARIES · RARE BOOKS ·
D 1408

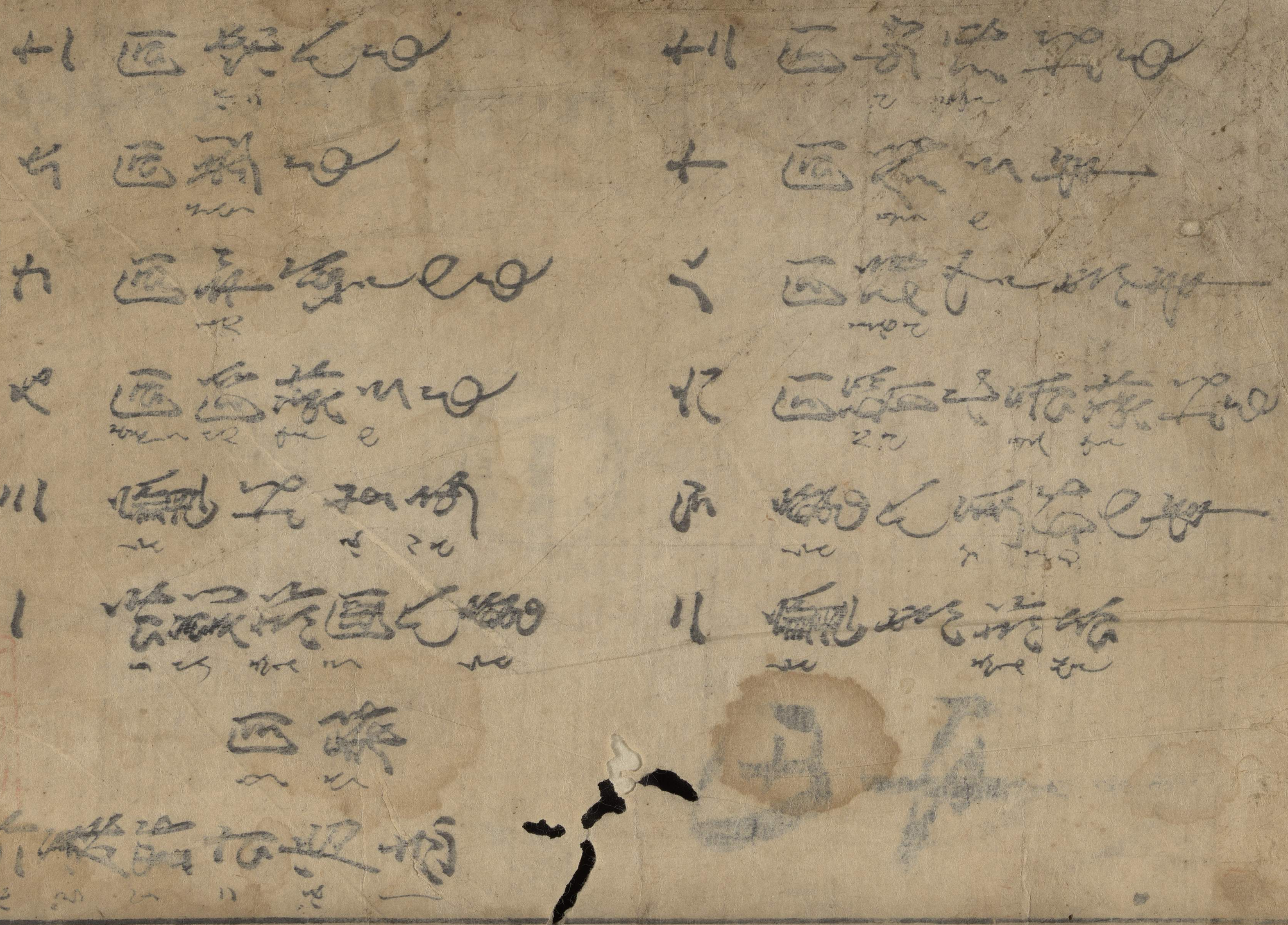
日之丰而先祖田中公来造之也

平野郷城藏

仁義理古武志

同録

一 和漢諸國乃鷹
二 鷹者諸君
三 鷹乃生色
四 鷹乃尾様の事
五 同銅横之事
六 同臂小居横之事
七 同呼座うの事
八 同鼓やうの事
九 同逃事
十 同終之事
十一 同楽乃事
十二 同地形之事



十一 [illegible]

十二 [illegible]

十三 [illegible]

十四 [illegible]

十五 [illegible]

十六 [illegible]

十七 [illegible]

十八 [illegible]

十九 [illegible]

二十 [illegible]

二十一 [illegible]

二十二 [illegible]

二十三 [illegible]

二十四 [illegible]

[illegible]

十三 同雉と搏事
十五 諸國鷹の異名
十七 鷹の裂米のこと
十九 鷹の異名
廿一 鷹と捕時節并ニ網ちらへ屋ゟ付事
廿二 上古の名鷹
廿四 鷹の故事
十四 同病の事付タリ療治
十六 鷹近しる事
十八 鷹に付て其字數
二十 鷹狗の異名
廿三 奥州鷹の巣之名

目録畢

握拳　四十八鷹之圖讃

我れ鷹を天地乃あひだ若しの物にしあ雅會の
中の悍鳥なり故に王公大人に稱とあひせるといふ
事なく古史舊載おかく名是と出を利禮記云
七月鳩化為鷹といひ又鷹乃學習とかへり去
秋には瑤光星發為鷹也云り邪朝と蒼鷹に聲
善吏良鷹に也比せり加旃少皞は鷹と爽鳩氏
と名付ぬ鳥乃司寇也し子產は見不仁者如鷹鸇
之逐鳥雀といへりかくのごとく古今の文人鷹代以て
猛烈神俊者才に学とへたり唐にくいまく五帝

乃時より鷲狩用ゐて漢唐の時代無雅これを貴ぶり
我朝にては神功皇后即位四十七年丁卯乃とし
こゝじめて百濟生より名誉の鷲狩貢ましそ
後人王十七代仁徳天皇即位四十二年甲寅のやし
有ゝしより鷲狩獻じ事まゝば天皇御獵に出給ひ鷲
をゝ雅狩捕ふふ此雅鷲獵乃もじめなり說
に鷹を拘ゝ所と云ゝ鮮とゝ川あくゝひあり浴
あくゝいさぎよく風に志れば行くゝのし見ゝ心ばし者小馳
逐小なりて一般擊てハ千里乃鬼小のがりて雲霄
小沖これを呼と紀ハ却さちりく人手小なれ志るぞふ

勇後武備の為ばまた武士れ尤愛とべき物也そ雅
鷲は遊戯乃業に似て君子のせざ為ばとはいへどもよく相
乃性武なるとも此に恥ざんばこれを辞とす為なるゆゑ
雁りしおかけ狩獵の道は孔子も取しかへばしそ楚人獵
校別孔子亦獵校をせいへりけれんや四時の狩獵は耕地
乃害とはぞうん為なれば古より制なれば此ならば蓋く
山野の狩獵に於ける時はいりける軍場に也腫の雪頭
乃氷といふは指紙おとし膚をさくれ是さしてへ霧葉
八陣乃かけ引にあらひ士卒の足をかゝる事なれば
武家に用ゐるすいぞうと云ゐ雁りしばさるはよりの高麗

寐に見をしまざらし先初雅の人は見なしかせん為は
普く鷹は種類を畫し上にハ鷹の法則異名飼やう
其外鷹に小さきく乃一切の故事用紙を書ならりし
握拳と名付捽に鏤付るゝ所り鹿紙ハ是を見んへハ
屏風かけ掛れ絵とゝ為も此ハ鷹を云ふ事を云ふ
志て和且亦遊佩とこれ是人ハ座ならして測明
が是絵乃琴に也なるゝ為は云ふ

鷹鶻總論

抑鷹を和漢とて雖も異名一般なるべしと云ふ雖
に和朝にてハ四十八鷹を号志くむかしより異類の

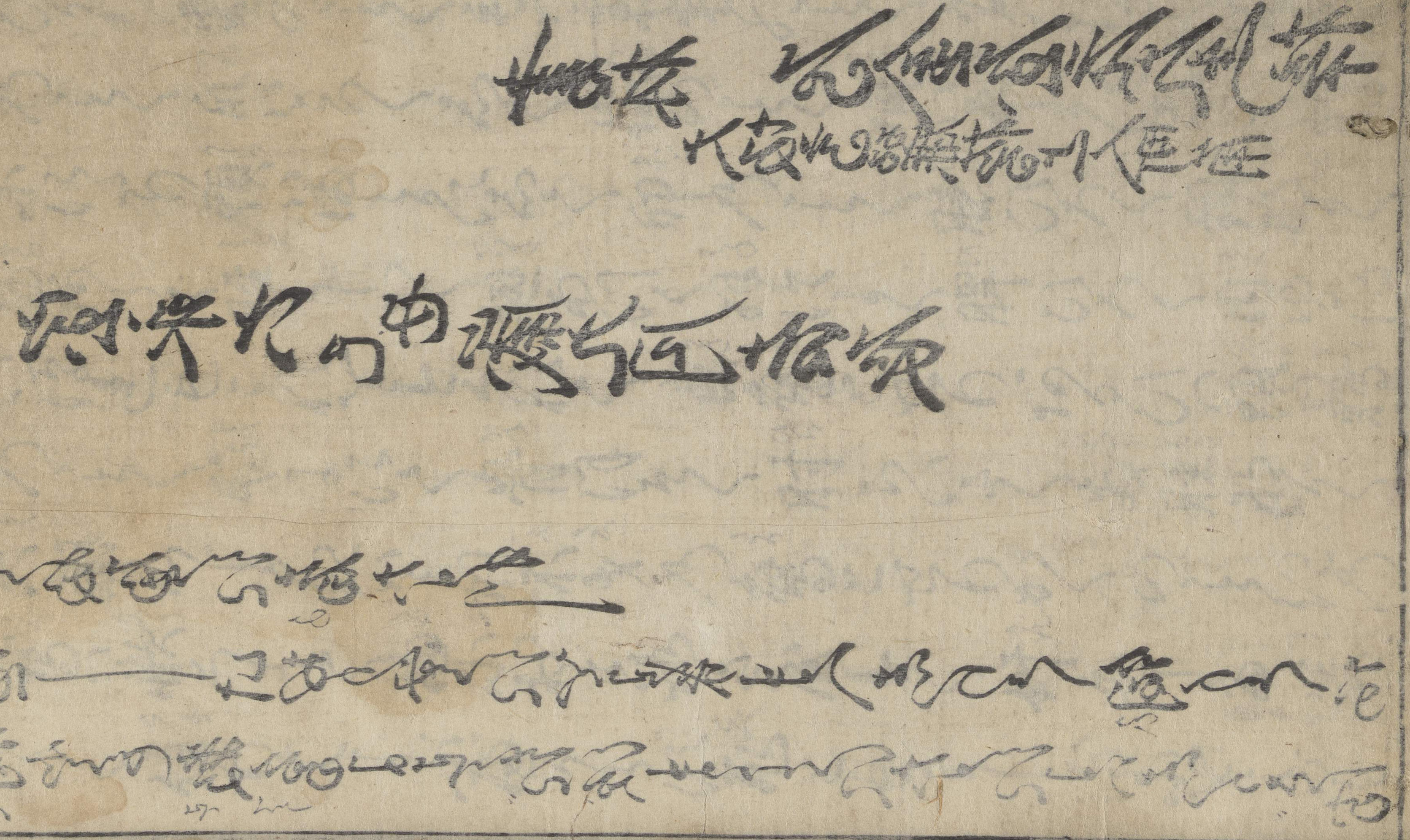
世すり四十八種にかぎ侍といひ侍へられし唯名ありて其
實形し侍獵にかりゆる鷹は数種形しおのこと鷲鴨
鵜巣鶴幼鷄までを加へ四十八種とをり又肉食をしく
五穀を食せざ侍をしべく鷹の類とをりたる云つまくりしくは
後にしるせりそ稱鷹れ指は十乃字れごとくなる紙名
とは川の字乃ごとくなるはよりしは爪はみじかくして並
なほ多雅れごとくなるをよしとは両がり高鉤のごとくなるは
よかしは尾は合處をよしとは立ことは極末のごとくのぞむ
多は熱胡にて侍をよしとは竹角は鉤の利がごとく脚名
荊乃抜るはひとしき紙よしとは前はしろくしてしき花

乃ごとく赤くして血と黙せるがごとく眼は明珠に新し
ひかりは電のごとく毛は雪れごとく力はたかく金
乃ごとく爪はとりくさて鐵のごとく頂は平らにさて削
にしたり頭は海どうにさて卵乃ごとく臆ひろく頸ほそく
筋ほうく脛そじかく翅あれくほそく脾ひろく肉ゆたに
いぼまもとれとしぐれて良鶯とせりかるひは頭は鶉
乃ごとく鴨よりて骨はそく肘ちいさく毒脛ほぐく
六翮乃ごとくれはれ不才乃鶯とせりかくのごとくれ乃
鶯は嫩らしく掏ふおどろきたく奸ふし海綿
うてく住りてよぶ竜ならば龍どもまし海ふとよぶと

摶（うて）少々已数（すこ）富（とみ）よりまさ（ぐ）須（ゆ）まことにたなれ（ば）ましたるさ（ぎ）海
面（ぎ）しし山おりなれとうしまへしりく銅（ひ）りとく物
そ海面紀者（ゆ）たなれ

宝永六己丑歳九月吉辰

書林　大坂高麗橋上人町角
局金屋庄兵衛梓



そし鷲よハ唐鷹ゑ
蒹鷹南蠻鷹琉球
鷹毛人鷹東国鷹
夷内鷹小國鷹中
西鷹四西鷹西西鷹
築地鷹とて西くに
たかあわそそ乃
わざはわ又天竺ふく
ハ鷹を鷲塲とい又
摩訶陀国ゑくハ隼
鷲といひ契丹国に
てハ摩鵄といひ新
羅西よりハ鷲と云
百濟西ふくハ鳩鳩と
いひ高麗にてハ儼雄
といひ震旦ふくハ都
鷹といひ中華乃地
ふくハ青骸といひ海

大鷲鷹

青といひ征鳥といひ
又晨風ともいひて代々
よそれ名かもわて是
をもてはそ名かわもう
鵜にくい数名数種
のたかはわてことに
四十八種にそれひか
せり今和漢あ鵜乃
たかれ名ともをとく
くにしはしまたの

二 鷹乃諸名

大鷹 小鷹 箸鷹
角鷹 鷲鷹 鶻
隼 鷂鶻 兄鵠
鳩雄鷹 鶻 鵰鶻
黒鶻 通鶻 木葉
鶻 山鶻 鵰 鵄

角鷹

赤鵊 青鵊 斎濃
鵊下 驄 底鵊 鏍
野袮 大鷹 婦鷹
兄鷹 綿 貢鷹
巣鷹 乃鷹 目白
鷹 頬玄 目玄 游
上 尻鷹 深山鷹
万歳鷹 鯉切鷹
鯉丸 白鷹 丹鷹
宗鷹 拴鷹 富摺
鷹 梅花鷹 推花
鷹 鶊鷹 鶩頭
鷂 誇鷂 鴦頭
鷂 鴇鷂 鶉頭
鷂 鴾尾鷂 鴨尾
鷂 足太鷂 格居
鷂 手取鷂 手綱
鷂 側見鷂 入見

隼鷹

鷹 拇倪鷹 拇掖の
鷹 妻掖鷹 一本
鷹 片尾鷹 刈結
鷹 捨田鷹 羽毘
鷹 尋安鷹 和安
鷹 耳雛鷹 三保
鷹 意深鷹 大尾や
鷹 像尾鷹 小屋像尾
鷹 学屋像尾鷹 八
文字屋像尾鷹 石龜
尾鷹 逆生尾鷹 まま
相尾鷹 鏑懸鷹
鴨居鷹 鈴懸居鷹の
鷹 路相鷹 富士根
鷹 手向九 木居
九 鉤風 木下 後
鳥 舞鷹 薫鷹 椪
鷹 青鷹 楊鳥 丟

大鷂

鷹 羅鷹 鴉鷹
老鷹 鵝鷹 良
鷹 醜鷹 三河鷹
蒭蓍鷹 亀居鷹
仇勢鷹 伊紡鷹
祢る鷹 乙女鷹
佐保姫鷹 乙洋弁
鷹 生強鷹 生弱
鷹 生大鷹 生細
鷹 鷲出鷹 毛短
鷹 毛厚鷹 毛薄
鷹 乙鵜 青鵜
古鵜 七鵜 弓梅
あ[illegible] あ行梅 あく
梅 [illegible] 姫鷹 餅
掾鷹 白 次鷹 天
鵰毛鷹 土屋山毛鷹
綱鷹 摘鷹 和鷹

雨鷹

深山鷲

吳鷲 鵠鷲 格鷲
床鷲 餌鷲 腥鷲
下鷲 筋鷲 南鷲
龠鷲 執鷲 赤鷲
二鷲 掬鷲 綾鷲
袖鷲 古鷲 亂鷲
病鷲 疵鷲 鼻毛
白鷲 掛爪白鷲
内爪白鷲 捕居白
鷲 子白鷲 三
爪白鷲 四爪白鷲
鴟鷲 梟鷲
右乃ヤ鷲ハ名ハ
得しといへども畧之

(三)鷲ハ生父
竪生 横生 赤生
黒生 赤白生 赤
黒生 赤黄生 黄

白生　黄黒生　大黒
生　小黒生　混黒生
生樫　生碧　鶉生
樫生　夜生　夜黒
生　紅葉生　真白生
北白生　晴白　本白
大白　小白　青白
綾白　蒲白　羽白
尾白　後白　爪白
市白　宮白　眉白
大眉白　小眉白　夜白
並白　雪松白　條白
白　霞梅白　緒あて白
領鑑白　ことろ白　七
所白　鳶紅生
これ外生のかわりによ
つてくわ色気乃
名付あり　一々と

鶚鷹

くりこしにてもすゆえ
ぐとなく
四 尾羽乃なし
おなじ鷲の尾ハ大石
おらふ石おなじ尾なら
し羽於然うは
尾とて六枚にて左
右をかく十二枚あり
鷲鷲ハ大乃六枚
の形よりたとえ
尾も枚わりて以上
十四枚あり又鷲ハ
名にて尾三枚あり
りつこしにくハ鷲
乃第一の羽と云古
といひ第二乃羽と
過渡といひ第三よ
ひ第十九羽と謎

小鷹

羅といひ十一より
まぼの羽を歩渡
といふたゞ右をちくす
二枚の中れ二枚の羽
を雁古奴といふ海
のうゝ羽を築鉚瓦
といふいづれも鷲の
ゝ羽は利きなどな
なゆゑ用ひ給ひし
にくゝ鋼羽となれば
そうち羽がひのうゝだ
は共四枚だ合せて一
四十ハ枚何りて
ゝ二ゝ風切とり
めほろ火うちなど
とてそ拂ひ
佐鷲とも羽がひ
の数ハ四十ハ枚わる

兄鷹

小白鷹

くなつとれハ尾根を
あふくひさしハ
かぶりとなハ折ぎと
いえあまし根とき
ゆがじとれハ蒿の
根とうもくきり
わぶりてあらめ折
さるおよくあべ折
ゆが見るハ根もの
ごく直よぬるとし
又冬冬冬なのひ
又ハ雑ととしハよ
ひて鶏の根そと
孫ぬきうハかが鶏
と陽へいぐしてけ
ぶりるれ老火よの
てまとあて先て
根となげつとれハ

大鵲

そのまたうへにたうろうをおもてにしてすへ
おきまたそのうへにたうろうをうしろにしてすへおき
このしかたをもつてたうろうをいくつもかさねてすへ
ることなり
○水よせ
水よせとはたうろうをすへたるうへにてまづ性水と
いへどもよごれたるをもつてたうろうのうへをあらひ
きよめてのち水をもつてたうろうのうへをあらひ
きよめてのち水をもつてたうろうのうへをあらひ
○水とり
水とりとはたうろうのうへにすへたるはちのうへ
をあらひきよめてのちまづ性水をもつてはちのうへ
をあらひきよめてのちまづ性水をもつてはちのうへ
をあらひきよめてのちまづ性水をもつてはちのうへ
○水あけ
水あけとはたうろうのうへにすへたるはちのうへ
をあらひきよめてのちまづ性水をもつてはちのうへ
をあらひきよめてのちまづ性水をもつてはちのうへ
をあらひきよめてのちまづ性水をもつてはちのうへ
○水とり
水とりとはたうろうのうへにすへたるはちのうへ
をあらひきよめてのちまづ性水をもつてはちのうへ
をあらひきよめてのちまづ性水をもつてはちのうへ
をあらひきよめてのちまづ性水をもつてはちのうへ
○水あけ
水あけとはたうろうのうへにすへたるはちのうへ
をあらひきよめてのちまづ性水をもつてはちのうへ
をあらひきよめてのちまづ性水をもつてはちのうへ
をあらひきよめてのちまづ性水をもつてはちのうへ

く孫と水よひうして
鷲の鼻のうへをぬ
らちうとゝ見ハながまと
おほう水をそろくさ
めじとのゝ又茶匙
よとくふくロよそく
いてもよしあくそく
いて噎しりうすか
りまと鷲ハ飢よそこ
孫どして飽よそこ
ぬうぬえさ白よりて
新鷲ハ雀鶉鳩
るどのお鳥をおもく
りひて白久して雞
雉鳩鴨をの大鳥
を飼べし鷲の餌
を作るとれハまとは
らひ鹿丁廻をよく

白生鷹

わらハ肉乃陳乾さら
不不潔の不肺ハ筋
をさり水よひくして
舟鐘と衡ようけて
飼べし泥くなるな
食を飼べからず極
寒乃ばせ川ハ鄙にて
餌をうばらしかぬ
ぬらぬ食俗そこぬ
ぬらぬ鬱と以ても
家よくりく餌と
飼べし又冬月ハ
鶩乃ばべ肥もべし
瘦と兄ハこほりやせ
く病やもし袁秋ハ
瘦どんばあ雨へらじ
肥と兄ハもゑやうに
労しもみやうに渇

鴉

して氣いさぎ紀よりらぶ又ゑて瘦ゑ紀ゑ力ゑ紀て蕪ひ
さくろゆるくして
雉をゆゑとゆゑ
しづ見おゑどもと
て林木よそぐ
又ゑて肥ゑ紀いこゑ
おとたわおどわ獵よ
ちうをゆくさび鳥
ゑ鳥ゑくしてうゑ
そぐまわ米よろ
てゆりび暮よそ
く的狗たづるよぶと
ゑいくをゑておそ
ゑんでちうゆくる
ゑて瘦うたいゑ
乳汁を合く夜ど

韓鷹

にかつてはれいこゆるゆえ
たゞ鷲ハ肥痩かど
これとよしとせ
いへども痩たるうへ
ともゞ[illegible]
肥痩ほどよくして救
日痛もあるとれいうるゝ
ど痩もちこの時
食ともどゝ次ゆゑれ
屈まひと也ど肥痩
もてにかどよくして
坐ちよ救日なるバ
かゞお肥をもちしは
これ食とひうゆゑ
なり他にてかくな
ゆえにわかゆえ
たゞ鷲ハ食れ飼やう
とれよしてごかく加減

鳴雄鷹

[illegible]

鷲上鷲

六 臂(ひぢ)は居(をく)やうなす
そ我鷲(たか)へ臂(ひぢ)乃法(ひぢ)と
然一とも臂(ひぢ)乃
法(ひぢ)をうしなふと見ハ鷲
ハ脚(あし)をそとなふて上
くいふぬものゝたとへ
いゆるといふ(ことゝ)鷲
をうゐはおそしとぬ
くぐし見ゑ(ことゝ)ぬ
ぬしたをれて居(をる)す
何ぞぬぬ(ことゝ)ぬ
はしじ居(をる)ゑ臂(ひぢ)
乃ちうとをさぐあく
鷲(あんち)を安坐(あんち)せし先
法祢(ほ)ひくわ(ほ)ひまを
とりて尾胞(とぶ)をるで
法くろひくるのと見
ハ臂(ひぢ)をあげてうどの

蜂鵲(くらくまたか)

さぶ鷲乃ぶくとび
ぶのが鳥をまつ鳥し
ほくまんで臂をわけ
さげうるひうどうす
るうなべしたとひ獵
ふいでどことなした
よわゆふ鳥ふいたな
まで臂よもへ鳥
さなよすけくもろと
しかへい巣鷲といい
えどとはひよ臂は
て用をそろゆるふ
ゆうさ就いまづくも
とてけうながゆへふ
よくるまてそうくり
ぬしゝ又久しく臂
よとゆふよれい鷲
乃足熱とろぬこ

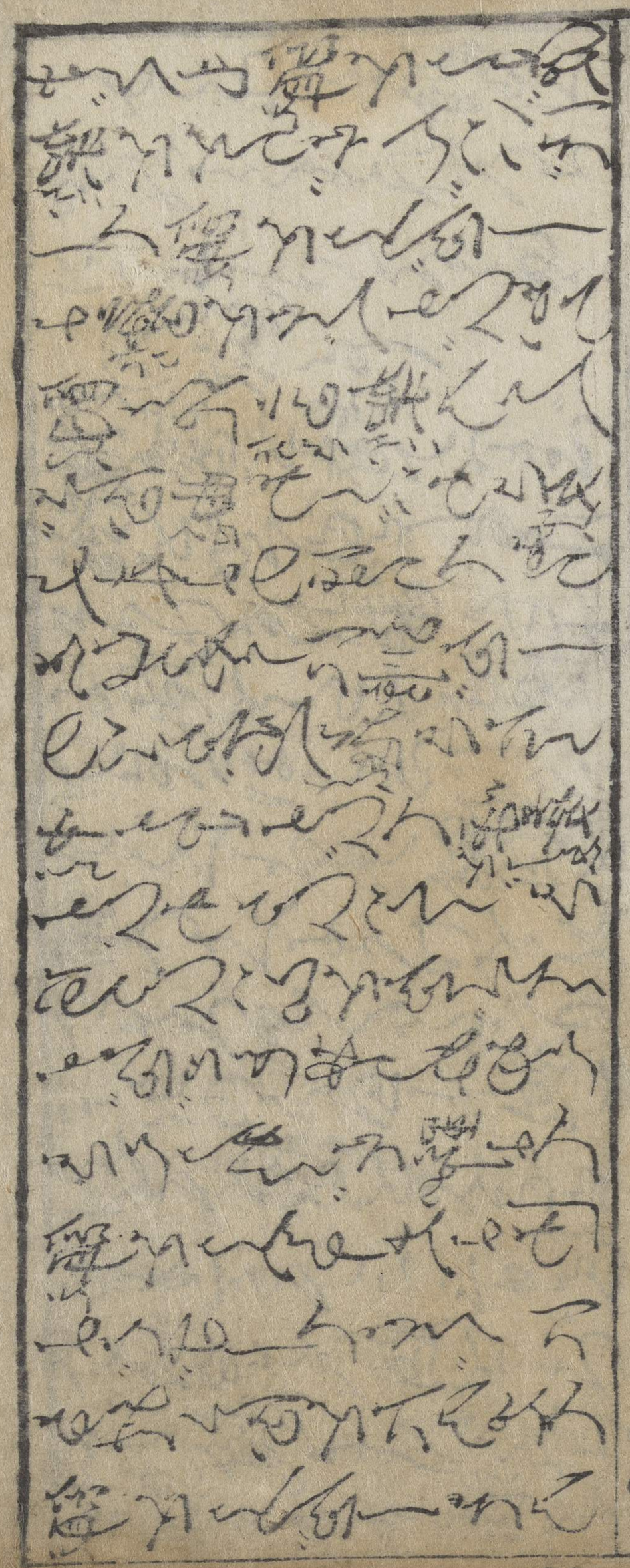
鵙鷹

のゆへよ鷹よひらやろ
布又ハ尾をとしら
えてもの人よ鷹
をとえて足をひや
さしむをよしとす
なえ

七 呼ぶ

新鷹とよびいろ
ハらかれよをよびな
らせて聞くよを
なよをよびるのね
るはじめをなよ
をよびるのをれ
来ないえをもの
らおもなかわるな
まれたとひまる
さ鷹といふとを
孫よ鷹とれいよびて

箭像尾鷹



鍋とうづ居しそのあれたるをたのみてよぐずしてもとぐに鍋をうつす大よわ也きえうれらぞ野よてよばごとやりぬぬんあるひいふとなぐそよびわるひいらくさ中よりよびて呼愛のいるぞ飛きたらしたるやうに別居し又まよのほりてありざる曲わらぶわさ又飼と紀言架乃うへよ鷹とも人よびおろして鍋とうづ居し架とうりぜんぺいぞまぐも鍋とうりぜ

石疊尾鷹

幼鷲

山鴈鷹

ゑぞりとなしまぐく
韓とにぎつ事はなひ
たちあるひはそゝ
見よあとなぐれはたひか
けそうん也とは
ん會よりけるにて
獵せんとほつとおき
ざしとてにとひとゝ
ふゆきてくるゆゑ
でふとなしていまに
はゆゑまるてゆゑや
ふまぐ思しおどろかれ
なるなり純さて翌日
ハ二度くらひ思し數
日ばらハ三度一月の
ちらこいえどもとなれ
なまゑ度よりもぐ思ひ
たこひるまゝ鬱と

逆生尾鷹

いまどきたびくくなるを
秋ハ清明を見ゆるに
みひさしきもとゝ思ふれ
てくなさて秋ハ脚清
まて屋まひを生ぶ
鷹ハ二月ハ後十日ハ
お湯氣さうんにして
たゞ物ゆるさ年にて
ゆくくなら清ゆ
秋冬ハ午を見ゆ
はくなくなるべし
時節を志ゆ事
たゞ日暮に猟をとる
よしとゝろん

九 逸

逸ゝる鷹を見ゆ
てよびそうんとゝ
いまきりよそらへする

真様尾鷹

だからだいきころ雉又
いきころ雉とながれ
なかにはなぎて鷹の
ゑつくなかまとれて
りらにかゝるゑべした
うこれをゑつけくと
びきろはゑらふ
よれ簑をきて鷹の
まへよわらがふくゆ
きやがて竿縄とか
けくと留べしいきた
る雉なくハ死ころ雉
となりにつるぎ木の
えぐまりけるハのりし
とゑなりふひゑて
なげひきゆるぎ
していきころ雉のど
きくにかんとれバ鷹又

紫鷹

さびさうてくらふ
あわゆひはゆくさ
くとおて鷲をそら
せどして飯してそら
ゆるやうもわり又本
うへまそ飼りてそり
ばまは四方一里を燃
てそゆるやうにり又
化の鷲をとへてそら
びさそゆるやうを
以傳をくし

十 鈴のまま

鈴はらいさくしてよ
くるはをよしとか
銅まてちいさんなぐ
けやをし鉄をよし
とん鷲はほくはま
いまだ高くはあ

鄙編鷹

くれたれてせるかに
瘡と生ぜるゆへとて
ひとくはれいれバそぶを
きにさゝ[illegible]げのりよ
きこゝろと心ゆて付ぐ

十一 架の事

架ハけつりの海清
のふさじかゝりの
りず人物喧闘と
こゝろとすゝ春秋
ハ僕とうとび冬ハ
陽とすゝしんべしむ
こぬかのけつりとゝも
とゝもゆゝりよう
いぞくぶりぐ格木
格柱架托そ格差
格外格低格的格
野格騫者格格箱

万歳鷹

鯉切鷹

為下をまつぐ為おほ
てくるのいへそのひ
るわ下化えこれをも
らじしてみぐりよも
るのてわたらぐ為とれ
い鷲いうのてとかく と
びたるとのみ
(十三)雉をとる為
雉とかくよりきたり
てよこさ鳥に鷹のま
へをもぐ為いよ雉
野よむうつくとびゆ
き飛に林木なれも
次ぐ雉むふよりとび
きたりて鷲のまへ
にはきたりいへ
雉たりのうしろをた
くさぬい下え雉を

虫鳥食鷹

そこゆうハ又下の雛
見ゆく回陵乱嶂の
はいごよりくハ最下
まりこれさしひとよ
志尚ますうんそえきを
たつへよく好悪をまる
をのて雄雛をふく
んで雌雄をところむ
ハ雄のはすれをそく
ゆきえは孫よ雄
雛と餌よふゐし
たつ直よのがって雛
をうんるとれハなざさ
を報てそくゆくとの
まり雛をえざるこ
されバさこされ
ゆくくて台とめく
よくハさすへ志とど

足大鷹

十四 鷹乃やまひ如何
それ鷹ハ性こうけし
てこれ孫に猟をもち
孫白猟してゝ間さ
ゝゝゆるひハ臂よりとゝ
あらひハ羅とうけて
昼夜調養しゆゑ
愛霄乃氣人に落せ
らまして外覚し内熱
してとゝもハやまひを
ゆゑ如何ばゆへよ
そ乃飲啄のいさゝか
ひをゆゑそれ肥瘦
とうぐひやまひを重
ぐ間乃思ぬもとをた
つ孫く星山の季嫺
本草とうんぞ茶性
にすりて方をはじ

鷗様鷹

鷹の屋まひをとふ
よしなしにいふ
なれしよりそれ
方をしなしなの
ことし

龍腦丸

龍腦 半分 大黄 五分
人參 三分

右三味龍腦をのぞき合して細末し龍腦を入りきはせ赤小豆の大さに丸し金箔を衣にしてあり毎服二丸にて用ゆべし

當歸散

當皈 一分 大黄 三分

右二味をごとん重皮

目白鷹

みくせんじさゆして
もちゆべし

皂角散

皂角 五分

右きざみ一とはを
まぶんませんじいゆ
はをまわりてくるたふ
き入くしよし

黄連散

黄連 大黄
蒲黄 黄栢
人參 各一匁

右きざみ一とは
をまぶんませんじい
やして用ゆべし

朱砂散

朱砂 雄黄 各一分
麝香 半分 三稜 三分

鳩顔鷹

山茵蔬　千金子
大戟　蒲黄　各一分半
右合也細末して猪肝図
といま一葉とりいてつ
けて童便みそく煎
じてとり出し肝を
さり薬をさり赤小
豆乃大さに丸じ毎
服三丸ぞくちよい
五丸づく用粉へし
水銀散
水銀　半分　軽粉
麝香　各一分
右もとりなませ風羽
出わ当ておひまり
りけてよし
鷹りし食をもとめ
ないとそく下しなる

眉鷹

ひは尿やどりはるひち
鼻のさはり熱し息を
ちて先気とくらくひ
ほ孫じるすとくく羽
毛とくろよろざはいみ
る病症に龍猛丸黄
連丸と用ゆべしぬん
一鷹もし息とくり氣
とちめくるぬさがり目
るれんざはるよ朱砂散
と用ゆへし又紀猛丸も
すしもし朱砂散なく
んば皂角散を代ても
らゆるし
一鷹もし物よおどろき
目とまるはるはらば
當皈散と用ゆべし
鷹もし喘急しくる

鶻顔鷹

ふさかり喫わらぶ大夷の
末を肉よはくゆんてかふ
だし又黄栢實をう
ちらぶれ肉よつくして
かくもよし又くるゝ乃
ちこゝを針して灸
を三七灶をゆりまよ
し
一鷹もし脚趾そぐ
肉なりけらいたれ拾
を針して針乃わな
へ王所撥をいまたたま
しむまばいゆりし
一鷹なるぐいてくやま
ぞんい山椒乃津を紡
の男子乃乳よわませ
て目よいるくまゆくし
又熊膽を乳よ和

鷺顔鷹

同よりいくらもよし又
雉膽もよし
一鷹和よさへきれて
同いさむらはは陸
椽子乃細末を乳よ
ゐるせて同乃ちらよ
いきくしし
一鷹外抱し内ひへ
色白青して其艸一味
をるゐるよは甘艸一味
とそんじ肉ほうもせ
ちゐるし
一鷹鼠傷うるわ
なよは輕粉松脂二
味と油末してぬるべ
しらはらへて痂
とるはじ痂とそり
て童便とぬるはわと

入見鷹

ゆゑどいゆゑ
一鷹いぐりになぐれ
虫ぐりふは狼牙草
の根をせんじ用ゆべ
し又油まして肉よ
けくみふてもよし
一鷹ねむしくひたるを
ゆゑは苦参をせんし
あらひてよし又梨蕎
根面部根二味末よ
して粧粉黄連をそ
まへこゆゑはまとりあを
せ肉よつくみふてぬん
おもを鷹肉をもくく
せとみをこのんで
れ見目にやせ
ろへいぐり繋ぎ痘
見れわやうし鷹は

鷲顔鷹

まこしぬりともとく
ろよろぶ鳥ぬけ
鴨白鷄黄狗乃肉
をうるすをいむべし
たかぬやまいへとも
ぬすなしよろつさ
まんて菓を用ゆ
又鷹乃大小によりて
菓を用ゆるぬ多少あ
ぬべきるすん又鷹一さ
いのなまひよい柳末
乃上ぬ虫乃家うら
玉子乃ごく班文あ
と乃をそりてそ乃中
よ何る虫をとりあ
にてつき食よ和して
うふと見い鷹乃百病
をぬまおとん妙菓ん

雪下鷹

はかる人鷹をかふるに
その鷹をくゞりひきれば
くさりていたくひた
うしろうつてかしまほ
ずに雉をとらしめあ
くまなく温血肉をくらへ
しめばやまひはやまんやう
にいゑんとふ薬りの
ちからを鷹のやまひへ
擲はりあるをもむとするよ
又外を教してちな
ち獵せしめばいよく
擲をくむべしその上
温血肉を飼ばそゑ
うにさうるをはんぜ
といひく鷹を水盆
の中に石の上へよを
へおゝ見ようかさし

櫻花鷹

めぬぎかん又ハむくぜ絶
乃肉をむそぎあほきに
うしろ絶ハやよひをさ
しては見るへし
㊄諸國乃鷹ちゃうす
そもそも鷹ハ三重にふ
わかるゝ事よ
てりんれその名かわり
はり天竺ゆくは鸇
塔といひ摩行陀国よ
ては隼るといひ契
丹国よりては鷹鷂こ
いひ百済国よりては鴉
鵜といひ新羅国よ
ては鷹るといひ高麗
よりては儼雄といひ
震旦よりては都瘧鷹と
いふかるゝ猟よりらひ

側見鷹

てるをそろふしろ鷂と
そふハう唐鷹三ゟ廉
鷂勇鷁鷂猿球鷹鷂
毛人鷹东出鷹或
内鷹小国鷂甲出
鷂四国鷹西国鷂
築紫鷹とそ出ゝく
よはり
(十六)雁鷂近乃よ
鷂仗鷂飼子云霊流
よハ雁鷂近とも云行手
流よハ鷂鷂躰とも云徹
彷流よハ雁鷂たたと
云下諏彷流よハ
鷂鷂とも云守缺
交傳よハ鷂鷂常と
云神津流よハ雁鷂
甘と云そちから鷂

挑花鷂

師鷹拘鷹射ことも
おなしり

十七 鷹拘袈裟のなり

錦拘袈裟　袖袈裟
鵜拘袈裟　鵜拘袈裟
乱拘袈裟　縞袈裟
鐙袈裟　小拘袈裟
砥草拘袈裟　鳥拘袈裟
鶏冠袈裟　三毛袈裟
打鐙拘袈裟　帛子拘袈裟
太刀の袈裟　袈裟とし

十八 字盡

足革　御絆　袈革
冠革　鐙　鐙

箸　鷹

引入攣手覆夜嫂祝
手執 同名 俎遠
天肋 趣子 脚 逸
格跨 逞緒 淩 像
縈 小趣 結 死 鳴
之緒 呼 索 餌 囊
簞 餌 籃 忍 餌 座
餌 肋 餌 囊 暫 囊
会 簞 夜 餌 囊 呼
餌 苑 傳 衣 云 手
蛛 手 鏡 目 山 鼻 紆
脚 緒 蜍 結 竹 挑 虎
筒 平 豆 鷲 搭 鷲
攤 攤 策 菊 雉 索

鵙鷹

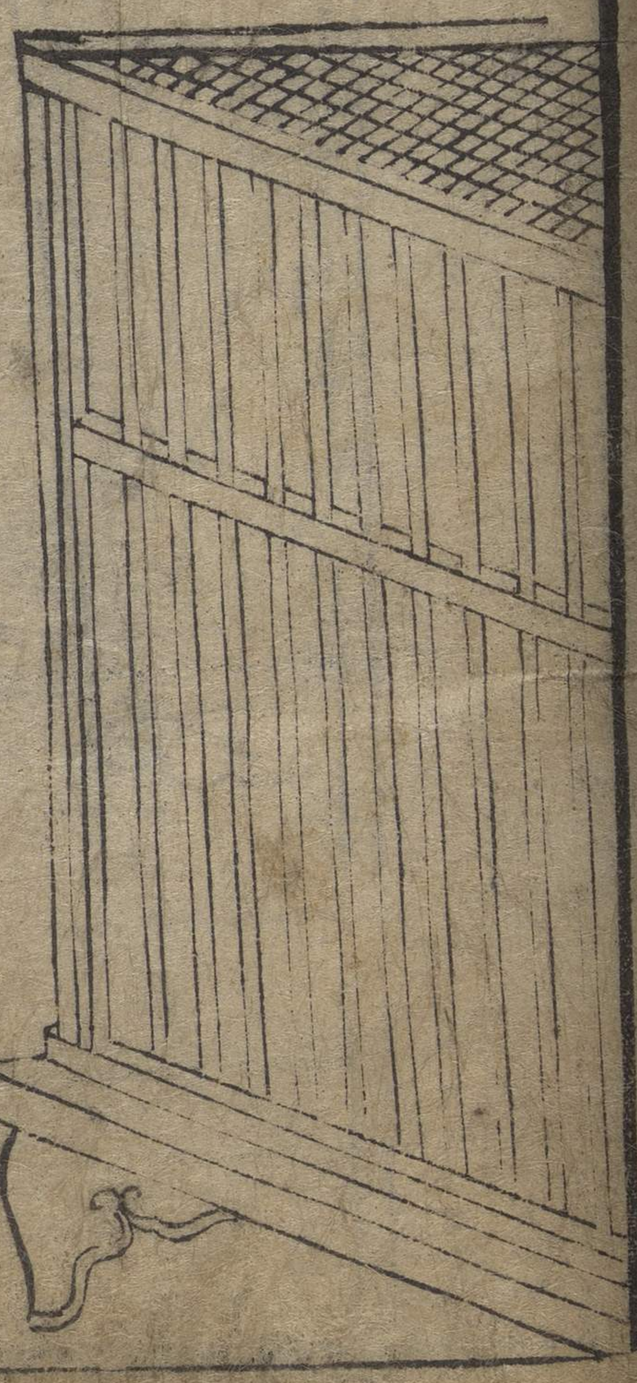
手韝曰 手字居
居爲 絶居 無絶居
居折 居上 巣雲
巣下 巣有 巣招
巣労 巣勁 巣溢
巣廻 柳近 卸辛
尾繋鈴 鈑板
含鈴 白鐘鈴 圓兒
鈴 七鈴鈴 鈴子鈴
艇 尾袋 鈴嚢 塞 と
霸 連權 繋 係繋
太鈴繋 小鈴繋
八頭繋 鞴 爲入
把 瘦 搔 豆 蜷蓮

鵰鷹

鶻同 骴る 血経
帰箇 餌飼 水車
虎子 激 志餌 温血
捺 雀 單 集 曦
と呼 音 為媒 三日
餌飼 四日 餌飼 碎
之飼 丑滓 掘取
呉 紅 鷙 搏 撥之
攫放 手放 試先
一合 木合 百合
合數 羽振 繡 翺
振舞 翔 瓶毛 餌
乞餌 鳴 鷁 鳴 檐
鳴 鷂羽 鸐羽 格羽

鵄鷹

角鴟



切蠹の木蠹水 岩根の踏水 伏の夜の夜の折 石上黒の竹一
窠節 指鳥竿 小竿 目壅 黐 黐筒 鷙 獵 狗 蒐 苗 狐 列率
和狗 曉狩 胡狗 夕狗 鶉狗 鶉狗 下狩 狗衣 鷲衣 鶉 木 裁
黄 走索 走索 打索 走音 去遣 鼯 當 挾

(十九)

鷙の異名乃事

条鳥 青骰 劔翎 鴟鳥 撃征 胡目 掣紲 決雲 鷄鳩 玉爪 負雀
玉立 題肩 鷙鳥 摩夫 星眸 鉤爪 風翊 掣電 金眸 青翅 黄眸
青冥 金距 晨風 低漁 漁陽白 海東青 凌雲君 老奉 雄姿
逸気 六翮 貪鑑

(十八)

狗の異名のなり

槃瓠 修毫 青曹 韓獹 鈴蹄 白靈 黄耳 烏龍 烏貲 南口
宋鶻 匂濃

(廿一)

鷙と死時節并に網にしらへやうなり

鷲とも雁よハ七月上旬をよ紀時節とも雁ハ八月上旬を深き寸同
下面をわしま時節とするゝ綱乃こしらへやうなす綱乃目四方一寸八
分縦八十目横五十目にして黄蘗を柿乃実なれ汁よわるせそ
そむ面しよく花乃色よにゝるゝ綱乃くりやう傳をしし

(十二) 上古ハ名鷹

醍醐天皇の白光鷹
天智天皇乃磐手野守 森
一條院の 鳩屋 赤目 ゑさこ 後一條院乃蒙花韓巻蒙沢

(十三) 奥羽鷹巣乃名

山村巣 油田巣 黒川巣 上黒川巣
冨沢巣 大爪巣 矢俣巣
大澤巣
牟遣巣

(十四) 鷹乃故事

もろこし楚国の文王雲夢といふ所にて鷲捕しまふと紀海青法
じきこをそびやしてとびのがりしがそれゆゑ所をみんとしかしふ所なら
くなりて毛かりかつかなす雪のごとく血くだなす雪のごとくなりしに

たてまつるを帝釈と毘首羯磨とこゝろのうちにかなしんでの帝釈は鳩と
なり毘首羯磨は鷲となり鳩鷲におはれて釈尊の所にとゞまりこゝろ
いりぬ釈尊これをはらんじて鷲にむかひ給へれ菩薩のひとに
てもなく命をこゝろさゝぐるんぢこゝろ鳩をさすくゐしこれ鳩の云
こゝろ鳩はまつ今日乃食ぬまれこれ鳩をさすけばいまれ又飢てしまへ
しかるは鳩乃命をこゝろとすかるじことをもりまゝずやとゝ釈尊しかる
らはまが足をさるまて食ぬまわさふ足しとなるふ足をとゝ
らぶるふ鳩まるをもう詠しまからば手をさりそへて鳩乃命をとゝ
しとなるへは手をそへても鳩よりもうはし一分をもつ鳩よ
うへて食せんといひなれは思ふらば一分をなんちが食として鳩の命を
にはけんとなるひなれは鷲これはなんじてさてはは釈尊の所にはしまつ
命滿しなるとて鷲はたちまちに毘首羯磨となり鳩はたちまつ
釈と現し圍繞偈師しなりけるとや